冷戦初期チェコスロヴァキアの住宅団地建設
――モデル団地としてのオストラヴァ都市開発における包摂と排除――

森下嘉之

1　はじめに

本稿は、冷戦初期（主に一九五〇～六〇年代）の都市・住宅開発の位相を、共産党政権下のチェコスロヴァキアを事例に考察するものである。[1] 具体的には、チェコスロヴァキア屈指の鉱山・工業都市であったオストラヴァにおける冷戦期の住宅団地の開発と、移住者が形成した社会についての分析を行う。筆者は既に、ドイツの占領下におかれた第二次世界大戦期におけるオストラヴァ都市社会の変容と戦後の住民移動について論じている。[2] 本稿は、前述の研究を継承したうえで、戦後四〇年に及ぶ共産党政権さらには二一世紀に至る都市社会の形成過程の一端を考察する。

本稿が分析対象として取り上げるのは、冷戦初期の一九五〇年代に建設が開始されたオストラヴァの住宅団地「ポルバ」地区である。チェコスロヴァキアのみならず、一九五〇年代の東欧諸国では、各地で大規模な工業団地の開発が行われた。一九三〇年代にソ連で建設された重工業都市マグニトゴルスクなどをモデルに建設された、東ドイツ（アイゼンヒュッテンシュタット）、ハンガリー（ドゥナイヴァーロシュ）、ポーランド（ノヴァ・フタ）の事例が挙げられよう。[3] ポルバも含め、その多くは、「社会主義リアリズム」建築として、後の時期の住宅建設とは異なる独特の都市景観を生み出した。

ポルバ団地に関する研究は、「社会主義リアリズム」建築の再評価という観点から、近年数多くの成果が現れている。オストラヴァの建築史家ストラコシュ（二〇一〇年）が、オストラヴァ文書館史料及び当時の建築雑誌及び同時代の報告論文[4]を駆使し、戦後オストラヴァの都市開発について概観している。[5] アイオワ州立大学の建築史家ザレコア（二〇一一年）の研究は、ポルバ団地を主要事例に、チェコスロヴァキアにおける戦前のモダニズム建築家と社会主義期の住宅建築・都市計画との関連を明らかにしている。[6]

このように、オストラヴァ・ポルバ団地については主に建築史の分野で研究が積み重ねられているが、現代史においては、一九五〇年代の社会主義建設期の一事例として触れられるにとどまっている。本稿が着目するのは、冷戦初期に建設された団地において、どのような人々が入居しえたのか、どのような社会・家族・人物像が当時の団地の「あるべき」理想とされ、そこからの排除の論理が働いていたのかについてである。近年では、ポルバ団地の住民が編纂したクロニクルやオーラル・ヒストリーが現れており、これらも本稿の分析の一助としたい。[7]

2　戦後復興のための住宅供給と社会主義政権による重工業化政策

終戦直後の一九四五年六月の内務省布告によって、オストラヴァでは九七の大工場、一一一の中規模工業、ドイツ資本および従業員数五〇〇人以上の工場が国有化されたほか、ドイツ人が居住していた一三〇〇家屋七九〇〇戸が接収された。[8] オストラヴァ域内に一万六五〇〇人居住していたドイツ系住民は市民権剥奪の上、その多くがドイツに「追放」された。[9] オストラヴァ州国民委員会の管轄地区では、ドイツ人追放政策

が終了した一九四六年一〇月末より一万四六二二人に対して収用地が分配された。[10]

ドイツ系住民の追放政策が終わった一九四六年一〇月に、共産党を中心とする連立政権は、全国一二万五千戸の住宅建設を含む復興政策「二か年計画」に着手した。[11] 同計画における、計画経済と私的所有の混合形態は、「社会主義へのチェコスロヴァキアの道」とも呼ばれた。一九四八年に成立した共産党政権は、翌四九年五月の第九回共産党大会において、集団化を前提とするソ連型社会主義への転換を表明し、第一次五か年計画（一九四九～五三年）に着手した。このような国家規模での重工業政策において中心の一つに据えられたのが、オストラヴァのクレメント・ゴットワルト・ヴィートコヴィツェ製鉄所（Vítkovické železárny Klement Gottwald VŽKG）、及び、新クレメント・ゴットワルト炭鉱・製鉄所（Nová huť Klementa Gottwalda NHKG）であった。一九五六年に開始された第二次五か年計画（一九五六～一九六〇年）では、この両製鉄所の鉄生産は一一一％増、スチール七八％増が計画され、一九六九年にはこの両者で六万六六四〇人の従業員を抱えた。[12] 当時のオストラヴァは「チェコスロヴァキア共和国の心臓」と呼び表され、「資本主義の都市計画とは異なるソヴィエト型の社会主義都市・住宅地を、民族(národ)に適合させること」が都市計画の目標として掲げられた。「資本主義的人間を排除し、新たなオストラヴァの街から同国全体の生活環境の再建が始まる」ことで、同市は「人民のための街」と位置付けられたのである。[13]

社会主義の建設を推し進めるチェコスロヴァキアにおいて、都市建設を担うプロジェクトとして一九四八年九月に発足したのが、「スタヴォプロジェクト（Stavoprojekt）」と呼ばれる組織であった。この組織内で主流を占めたのが、一九二〇～三〇年代にバウハウスや近代国際建築会議（CIAM）、ソ連構成主義の影響を受けた「社会主義建築家連盟」のアヴァンギャルド建築家であった。[14] スタヴォプロジェクトが目指した住宅建設は、戦前の共産化以前の建築との連続性が指摘されるが、その象徴ともいえるのが、戦前に建設されたチェコ東部の都市ズリーンにおけるモダニズム建築の労働者住宅であった。ズリーンは一九世紀より製靴企業バチャの企業城下町として発展した都市であり、戦前にバチャで労働者住宅や都市建設を担っていた建設部門局は、戦後にスタヴォプロジェクトに引き継がれた。材質・工法等が規格化された住宅建築は、「ゴットワルドフ」へと改称された都市名にちなんで「G四〇」タイプとして定められ、一九五〇年代の住宅建設に広く採用されることになった。[15] 「社会主義リアリズム」の建築様式は、一九四九年の第九回共産党大会において採用され、一九四五年から一九五二年の間に、オストラヴァでは一万四八二四家屋が建設された。[16] 同様式の住宅建設は、スタヴォプロジェクトの建築家ズデニェク・ラコミーの主導によって、全国各地で推進された。[17]

3　一九五〇～六〇年代における オストラヴァ・ポルバ団地の建設

一九五〇年代の重工業化政策と、チェコスロヴァキアの「社会主義リアリズム」を最も体現した建築が、オストラヴァ市西部に計画されたポルバ団地[18]であった。以下、主にストラコシュとザレコアの研究に依拠して整理していく。

ポルバの建設用地は、戦後にドイツ人土地所有者ヨハン・ヴィルチ

図１　オストラヴァ・ポルバ団地の建築様式（筆者撮影）

ェクから収用したポルバ地区一〇五ヘクタールが割り当てられ、一五万人を想定した団地建設が一九五二年七月より開始された[19]。ポルバ団地の建設を任されたのが、戦前にブルノの機能主義建築家イジー・クロハのもとで学んだ建築家ウラジミール・メドゥナであった。この時期の都市建設には、ソ連の建築アドヴァイザーが関与しており、一九五二年一〇月にはチェコ建築家の代表団がソ連を訪問していた[20]。ポルバ団地は建設時期により全八区域に分類されるが、一九五〇年代前半に建設された第一～三区は、レンガとコンクリート式天井を基盤に、ルネサンス・古典主義の装飾を施したファサードに三角屋根が備えられた。中庭を囲む四階建ての住宅が左右対称・規則的に配置され、道路網との関係を配慮した配置であった。ポルバ団地における建築上の最大の目玉ともいえる「オブロウク」は、一九世紀前半のペテルブルク宮殿広場の参謀局を再現したものであった（図１）。第一次五か年計画によって全国に建設された住宅は一七万六四四六戸に達したが、ここで導入されたのは、台所つき二部屋住宅で平均三二・二七㎡の五～六階建て「T一五タイプ」と呼ばれる集合住宅であった。ポルバでは台所九・八五㎡、リビング一六・八㎡、寝室一五・六㎡、一戸当たり平均二・二部屋で、四八㎡の広さを確保した。また、一九五三年に建設された家族向け三部屋住宅は、平均四九・一二㎡（ポルバでは五四㎡）のT七四タイプと呼ばれた[21]。

しかし、ポルバ団地一～三区に代表される、「社会主義リアリズム」建築による都市建築は、一九五〇年代後半のスターリン批判に伴う同様式の否定、フルシチョフによるパネル住宅建設の導入によって、大きな転換点を迎えた。一九五九年三月の党中央委員会では、一九七〇年までに全国一二〇万戸のパネル工法による建設が掲げられた[22]。ポルバ団地においても、第四区以降の住宅ではG五七タイプ[23]と呼ばれるパネル工法が導入されたことで、一九六三年末までに、六万三三八五人が居住する一万八四〇〇戸が建設された[24]。第四区では玄関、台所一〇・一七㎡、リビング二一・五二㎡、寝室一四・三一㎡、浴室トイレを有していた[25]。一九六〇年代のポルバ団地の全九八〇六戸中、ほぼすべての世帯に集中暖房、電力照明、ガス、浴室、上下水道が備えられていた[26]（次頁、図２）。当初は独身者用の小規模住宅の比率が高かったが、一九六〇年代には全二万五三〇三戸中、二部屋住宅は一万五一〇九戸と半数以上を占めるようになり、子どものいる若い世帯への室内空間等の改良が施されていたことが伺える（同、表１）。託児所や図書館、五つの映画館、緑地の整備がなされ、一九六五年に建設が開始された第六区は、高等学校と県立

病院のエリアとされた[27]。チェコ国内では、一九六八年においても人口の四〇％以上が一人あたり八㎡という戦前とほぼ変わらない「過密住宅」に居住していたことに比して、ポルバ団地の例外性は際立っていた[28]。

一九五六年には、英米他、ブラジル、ウルグアイ、日本などの各国から視察団が訪問した。一九五七年七月一三日には、フルシチョフ第一書記がポルバを表敬訪問したほか、一九五九年七月にはエチオピア皇帝ハイレ・セラシエ、一九六〇年一一月にはカンボジアのシハヌークら各国元首の訪問を受けた[29]。ポルバ団地は、チェコスロヴァキアにおける社会主義建設の「成果」を諸外国に発信する場として位置づけられた。

1	玄関	10.82 ㎡	6	寝室	14.31 ㎡
2	玄関	7.73 ㎡	7	寝室	14.64 ㎡
3	台所	10.17 ㎡	8	寝室	14.80 ㎡
4	リビング	21.52 ㎡	9	浴室＋WC	8.42 ㎡
5	リビング	18.65 ㎡	10	玄関	5.5 ㎡

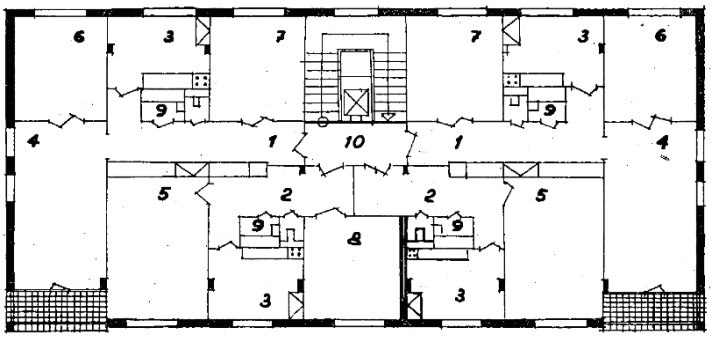


図２　1950 年代建設のポルバ住宅団地の見取り図
出典：Bartoň (1964), p. 20 より作成。

表１　1960 年代におけるポルバ地区統計

	1963	1967		
住民数	67,385	85,478		戸数
女性	20,437	27,953	1 部屋住宅	2,652
15 歳以下	23,133	26,539	2 部屋住宅	15,109
出生	1,346	1,284	3 部屋住宅	5,957
死亡	241	405	4 部屋以上	740
自然増	1,105	879	独身寮	845
流入者数	5,394	5,689	総数	25,303
退去者数	2,015	2,775		
移住による増加	3,379	2,914		
婚姻	474	587		

出典：Archiv města ostravy. Čísla o Porubě.

4　工業団地の建設主体と入居住民の内訳

本節ではまず、住宅建設の担い手について確認したい。一九五三年一二月二二日第一〇六号法において、住宅建設の担い手は国、企業、住宅組合、個人の四者とされ、特に戸建て住宅に関しては、戦前以来の住宅の私的所有が認められていた。実際に、一九五〇年代の全国統計によれば、個人建設住宅が住宅建設総数の三分の一から四分の一を占めていた[30]。一九五八年の第一一回党大会で党は、住宅建設の滞りに鑑みて、企業や組合による住宅建設を促す方針を打ち出した。一九五九年五月一二日第二七号法によって設立された住宅組合は四二〇、組合員数は一万六二一一人を数えた一方、一九六一年には政府による建設援助を受けた住宅は一〇％程度となっていた。他方、一九八九年までに組合員数は一二五万人以上、組合住宅の比率は四〇％を超えた[31]。オストラヴァのポルバ団地においても、一九五〇年代後半から民間所有の家屋は九〇％、住宅組合は一万八六家屋に増大した[32]。一九六〇年代のポルバ団地の建設主体は、オストラヴァ・カルヴィナー製鉄所が六一六六戸、地区住宅公社（obvodní bytový podnik OBP）が九八〇五戸、住宅組合が六三四五戸、その他二九八六戸となっており、国から企業や住宅組合へと移管されていく様子がうかがえる。また、同公社の建設数のなかでも、二部屋住宅が八千戸以上を占めていた[33]。このような住宅政策の変容からは、ポルバ住宅の入居者は職場と住宅組合への加入によって、単身者または若年世帯を中心に、地域社会に組み込まれていくことが想定されていたとみることができよう（表2、3参照）。

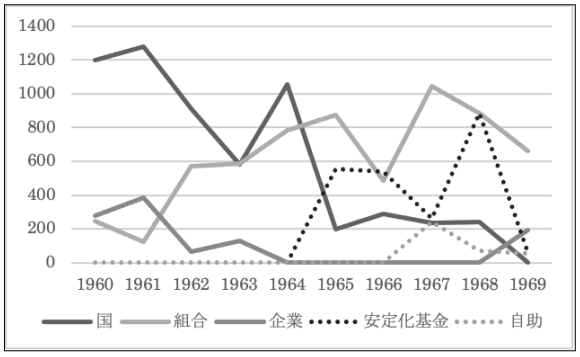
次に、ポルバ団地の住民構成について見ていきたい。同団地の特徴は、入居者の多くが定住したことにあった。一九六八年には、市内

表２　1948～1959年の全国での住宅建設数

	総数	政府建設	個人建設
1948	21,683	11,883	9,800
1953	38,957	29,657	9,300
1959	66,718	46,217	20,501
合計		354,507	180,470

出典：*Stručný statistický sborník 1945-1960*, p. 202.

表３　1960年代ポルバ地区における住宅建設の出資者推移



出典：Bartoň (1971); Prokop, et al. (1985); Jiřík, et al. (1997) より作成。

の住民数三〇万四一一四人のうち、定住者二七万一二一九人、一時滞在者三万二八九五人を数えていたが、ポルバを含む第八区では住民八万八二二三人中、定住者は八万四四八六人に達しており、市内では最大であった。[34] 一九六一年には、ポルバ団地の住民四万六七六〇人中、一五歳以下は一万九三八一人と半数近くに達しており、子どもたちのための九の基盤学校、一〇の小学校、七の託児所が設けられていた。一四歳未満の比率が市内では二三・四％に対して、ポルバでは三七・二％を占める一方で、六〇歳以上の比率が市内では一七・八％に対して、ポルバでは三・七％にとどまっていた。以上の事例から、一九六〇年代以降のポルバは移住者の街から、現地で生まれ育った人々の街へとその性格を変えており、オストラヴァの他の地区に比して、相対的に「若者の街」であったといえる。[35]

住民の民族構成についても確認しておきたい。一九六一年の統計によれば、市内の民族構成はチェコ人が二一万六八八九人（九二・六〇％）を占めており、次いで、スロヴァキア人一万二七一三人（五・四三％）、ポーランド人八八三人（〇・三八％）、ドイツ人六六七人（〇・二八％）であった。一九三〇年にはドイツ人が二万四六八二人を数えていたことに比べると、戦後の「追放」が市内の民族構成に大きな影響を及ぼしたことが伺える。[36] 一九五二年におけるポルバ地区の一時滞在者八九名の出身地は、ハンガリー、ブルガリア、東ドイツ、ポーランド、ロシア（ソ連）であり、その大多数はヴィートコヴィツェ製鉄所・炭鉱の労働者であった。[37]

共産党政権の発足直後にあたる一九五〇年の全国統計によれば、オストラヴァに住居登録のある一七万五四〇三人中、移住者の人数は六万五六八八人、比率にして三七・四％であった。これは、住民の大半が入れ替わった自治体も珍しくない国境地域はもとより、チェコ側すべての県都の平均（五一・四％）の中でも低い比率であった。オストラヴァが一九世紀以来の探鉱・工業都市としての歴史から、季節労働者を近隣地域から受け入れ続けたことがその理由として挙げられる。[38] ポルバ地区においても、一九六八年の統計によれば地元の北モラヴィア県八一・二％が圧倒的多数を占めていた。[39] 同年のポルバでの一家屋当たりの平均居住者数は二九・七人に達しており、同地区の住民の多くが大規模な集合住宅に居住していることを示していた。ヴィートコヴィツェ製鉄所に近接するフラブーフカ地区、ザーブジェフ地区に比して、ポルバでは独特の団地住民としての意識が生じたと考えられる（表4）。

表4　戦後建設された住宅地区の人口増加

	フラブーフカ	ザーブジェフ	ポルバ
1946	5,333	15,232	1,497
1950	5,346	16,414	1,596
1961	10,581	21,963	42,575
1970	30,473	39,223	83,196
1980	38,810	34,177	93,667

出典：Radim Prokop, Jiří Kovář, „Ostrava novodobý vývoj a problematika obyvatelstva současného průmyslového velkoměsta“, *Ostrava. Sborník příspěvku k dejinám a výstavbe mesta*, 13, 1985, p. 172.

5　社会主義期における不可視化された「排除」

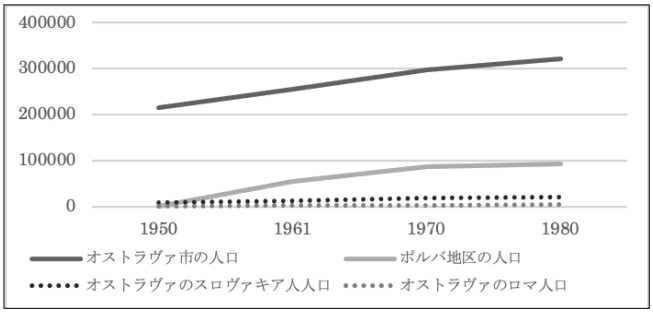
本節では、近年進められているポルバ団地の入居者への聞き取り調査を紹介する。最初に、団地建設当時の入居者に関する新聞報道から見ていきたい。鉱山労働者アルノシュト・ヴロナは、妻と五人の子どもとともに、オストラヴァ近郊のブトヴィツェから一九五一年にポルバ団地

に入居した。転居以前は車両工場のクレーン工であったが、鉱山で短期労働の経験があったことから、オストラヴァの鉱山労働に「転職」したという。現地では模範労働者「スタハノフ」として表彰され、新居では娘も生まれた。食器棚やベッドなど新居の家具は国からの補助で購入し、「クリスマスまでに絨毯を買い揃える」つもりだという。[40] 二〇一九年に刊行されたポルバ住民の回想録によれば、市内ヴィートコヴィツェ製鉄所に勤めるヤン・シュピナ（一九二二年生まれ）は、妻アリツェと一人の娘と共に、一九五〇年三月にポルバ団地最初の入居者となった。家族は台所つき三部屋住宅を確保したが、当時は製鉄所建設の労働力（ブリガーダ）が大量動員された時代であり、ポルバには彼ら・彼女らのための一時バラックが建てられていた。妻はこの若い労働力のために、バラック食堂で働いていたという。翌年には長男が生まれ、家族ともポルバで過ごしたが、住居設備や隣人関係において肯定的な記録を残している。[41] 団地への入居は、以前の社会生活からの大幅な物質的・精神的改善と捉えられることが多かった。

もっとも、ポルバ団地の環境については、住民の反応は必ずしも肯定的なものばかりではなかったようである。迅速な大量生産を目指したプレハブ・パネル工法への転換によっても建設の遅れは改善されず、パネルの継ぎ目にはしばしば隙間が生じてしまい、絶えずメンテナンスが必要になったという。[42] 別の記録によれば、「一九五四年に引っ越したとき、道も玄関も泥まみれであり、靴を見ればポルバの人間だとわかる」ほどであり、「オストラヴァで白いシャツとブラウスを着ること、窓を開けることは不可能」なうえに、皮膚病も増加していたという。[43] 一九六五年には、市の役人が「人々はポルバにやってきて、ただ寝るだけであり、生活はほかの場所にある」[44]と発言していた。ポルバは建設当初から特定の工場労働者の団地として設計された経緯があり、団地内で完結する「田園都市」的な設計ではなかったことに留意する必要があるだろう。

その一方で、戦後オストラヴァ・ポルバにおいて、団地生活から「排除」された最大の層はロマ（ジプシー）であると考えられる。一九四八年の共産党政権の成立後、とりわけオストラヴァでは一九五三年以降に鉱山・製鉄労働のためのロマの移住が本格化した。一九四七年には一三四人に過ぎなかったロマ人口は、一九六六年には三七八六人へと増加の一途をたどった[45]（表5、6）。一九五三年の統計によれば、市内一一七七人のロマのうち、ヴィートコヴィツェ製鉄所に七六人、建設業に一二五人、鉱

表5　社会主義期オストラヴァの人口推移



出典：Bartoň (1971), Prokop, et al. (1985), Jiřík, et al. (1997) より作成。

表6　社会主義期オストラヴァの民族構成（人数（%））

年度	1961	1970	1980
チェコ人	216,889 (92.6)	255,026 (91.6)	295,821 (91.9)
スロヴァキア人	12,713 (5.4)	18,000 (6.5)	20,537 (6.4)
ポーランド人	883 (0.4)	816 (0.3)	1,102 (0.3)
マジャール人	681 (0.3)	974 (0.3)	1,085 (0.3)
ドイツ人	667 (0.3)	580 (0.2)	468 (0.1)
ウクライナ人	392 (0.2)	397 (0.1)	445 (0.1)
ロマ	1,999	3,241	4,761
その他	1,997 (0.8)	2,863 (0.9)	2,615 (0.9)

出典：Prokop, et al. (1985), p. 194.

工業に一一一人の就労が見られ、流入者の四分の三が就労年齢層であったとされる。一九六六年の統計によれば、周辺の農村部を含むポルバ地区には三五家族二〇九人のロマが居住しており、過密住居は一二家族と三分の一程度であったが、ロマが最も多い市中心部（一八〇家族九五七人）では過密住宅が四分の三の一三六を数えており、地区によるロマの居住環境の違いは明らかであった。[46]

このような状況に対して、一九五〇年五月九日の県国民委員会は、「スロヴァキアからチェコへの望まれない移住、理由なき労働割り当て」であるとして、政府にロマの状況改善を求めてきた。これに対して、内務省はオストラヴァ当局に一九五二年九月二日付で、「ジプシーを対象とする布告を全国レベルで出すことは差別的な措置であるために不可能である」と返答した。現場での健康管理や学校問題については、県（地区）国民委員会の管轄とされたため、一九五二年一一月に、市当局は「ジプシー問題解決委員会」を設置し、翌一九五三年九月一九日に「新しい人間教育のためのジプシー出自者の世話」を承認した。各地区で一人、ロマの労働代表者一名を選出・任命し、市当局は同委員会を通して、ロマの就業状況、住居、衛生状態などの報告、学校、ロマのコミュニティの状況などを調査した。[47] それによれば、一九五六年にはオストラヴァで、不衛生な住居に住む家族が一六三組、木造小屋が九九家族などであり、適切とされたのは九八戸のみであったという。[48]

共産党政権にとって、ロマの定住化政策は重要な意味を持っていた。一九五三年一〇月の報告によれば、当該地区に居住するロマ二三二家族のうち、居住者として登録されているのは四七家族のみであった。[49] 第一一回共産党大会を経た一九五八年一〇月一七日第七四号法によって、このような「ノマド」に対して六か月から三年の禁固刑が定められ、一五歳以上の非定住者は期日内の登録が義務付けられた。市当局がロマ住民に対して団地に住居を分配し、病院での出産を援助したことで、一九六〇年には衛生的に問題ないロマの住居は一五％のみだったが、一九六六年には半数に達したという。[50] 政府の定住化政策とは対照的に、オストラヴァ当局は工業地域での労働力不足のため、不定住であってもロマ移住者を多く必要とした。

住民の民族構成については前述したが、ロマ住民の多くを占めたスロヴァキア出身者について改めて触れておきたい。オストラヴァ市内において、スロヴァキア人住民の数は一九七〇年には一万八千人に達していた。スロヴァキア出身者は男性の就業年齢層の比率が高く、また職種的には労働者層の比率が高かった。一九八〇年の統計によれば、ロマ住民比率は市中心部の再開発地区（一区）において七万二八三六人中五四九人であったのに対して、ポルバでは地区人口一〇万七六九一人に対して、ロマ人口は二四七人にとどまった。一方、同地域のスロヴァキア人居住者についてみれば、中心部（一区）では二五七八人、全体の五・七八％であったのに対して、ポルバでは五三二一人（五・六八％）と、比率的にはほぼ同じであった。オストラヴァ中心部では、スロヴァキア出身者の中でもロマ比率が高かったのに対して、ポルバなどの新興団地では、ロマとして登録されないスロヴァキア出身者の比率が高い傾向が見られた。[51] ポルバ住民の回想によれば、ロマは決して騒音や軽犯罪の主因ではなく、負傷による退役後に映画館で働いていたときには、映画館での売り上げを持ち帰る際に襲撃を受けないよう、ロマたちが家までボディガードを買って出ていたという。[52] もっとも、このようなロマ住民がポルバ団地の住民であったという記録は定かではなく、団地住民の世界と職場・市街地のロマ社会とは切り離されていたと考えられる。

6　おわりに

以上、本稿では一九五〇年代初頭に着工されたポルバ団地が、社会主義の「モデル団地」を形成する一方で、入居における包摂と排除を内包する過程を考察した。「新しいソヴィエト的人間」の形成は、同国における社会主義の建設当初の基本方針であった。[53]「共和国の心臓」とも位置付けられたオストラヴァにおいて建設されたポルバ団地は、都市計画、建築様式、入居者層において、社会主義建設の象徴として位置づけられていた。ポルバ団地において注目すべきは、人口一〇万人規模の街の六〇年の歴史のなかで、作家やミュージシャンなどの文化人の出身者が多く見られることである。[54]ポルバ団地に入居しえた労働者は、「成功者」と見なされる傾向があり、団地に対して肯定的な返答が寄せられる傾向が確認できる。

その一方で、ポルバでの団地建設は一九五〇年代から七〇年代までの長期に及んだため、五〇年代後半のスターリン批判や六〇年代の改革共産主義の影響も反映されていた。「社会主義リアリズム」建築からパネル工法への転換が行われた一方、入居者の増加に伴う社会インフラ整備と住環境の改善は継続された。建設当初の「新しいソヴィエト的人間」の理念よりも、増大する入居者の生活環境への対処に重点が置かれるようになった。住宅の建設主体が一九六〇年代に政府から地域の住宅組合に転換され、団地での出生が増加したことで、ポルバ入居者の地域社会への定着は加速した。他方、市中心部におけるロマ住民世界は、ポルバにおいてはある程度不可視化されていた。社会主義の統合理念と「モデル団地」としてのポルバは、都市社会内部における階層分化のうえに成り立っていた。

最後に、冷戦初期の住宅団地が二一世紀の現在において持つ政治的意味について触れておきたい。「はじめに」で述べたように、一九五〇年代前半「社会主義リアリズム」建築は体制転換後に再評価が進み、ポルバ団地一～三区については二〇〇三年に保全地区に指定されている。共産主義体制の政治的記憶と結びつけられ、当時から建築的にも賛否のあった「社会主義リアリズム」が、体制転換後の都市再開発の流れの中で保全対象として評価されるようになった背景について、現代史の観点から更なる考察を進める必要がある。

注

（1）本稿は、社会経済史学会第八八回全国大会（二〇一九年五月一八日）パネルディスカッション「冷戦期の住宅建設・都市開発――西ドイツとチェコスロヴァキア」に基づく。

（2）森下嘉之「「ヒトラーの新秩序」とその後がもたらした地域社会の変容――チェコ工業都市オストラヴァを事例に（一九三八～一九四八年）」『歴史と経済』六〇巻三号、二〇一八年、一二-二一頁。

（3）スターリン期のソ連・東欧諸国における都市計画については多くの比較研究があるが、さしあたって以下を参照。Thomas M. Bohn, (Hrsg.), *Von der „europäischen Stadt“ zur „sozialistischen Stadt“ und zurück? urbane Transformationen im östlichen Europa des 20. Jahrhunderts*, München, 2009.

（4）Miloš Bartoň, „Ostrava-Poruba, největší městské sídliště v ČSSR“, *Ostrava: Sborník příspěvků k dějinám a výstavbě města*, 2, 1964, pp. 9-28; *Ostrava socialistická: sborník studií k výstavbě města v letech 1945-1970*, Ostrava, 1971.

（5）Martin Strakoš, *Nová Ostrava a její satelity: kapitoly z dějin architektury 30.-*

50. let 20. Století, Ostrava, 2010.

（6）Kimberly Elman Zarecor, *Manufacturing a socialist modernity: housing in Czechoslovakia, 1945-1960*, University of Pittsburgh Press, 2011; “Czechoslovakia’s Model Housing Developments: Modern Architecture for the Socialist Future”, in: Vladimir Kulic, Monica Penick, Timothy Parker (ed.), *Sanctioning Modernism: Architecture and the Making of Postwar Identities*, University of Texas Press, 2014, pp. 66-89.

（7）Jiří Lexa, *Odkazy porubských kronik*, Ostrava, 2007. Věra,Šmajstrlová, Jiří Lexa, *Paměť Poruby*, Ostrava, 2019. 四方田雅史「「両義的遺産」としての共産主義遺産――チェコ・ポーランドにおけるスターリン様式建築を中心に」『静岡文化芸術大学研究紀要』一五巻、二〇一四年、五－五六頁。田中由乃「チェコにおける社会主義時代のパネル住宅地の地域価値の形成――オストラヴァ工業地域を事例として」『住総研研究論文集』四二巻、二〇一六年、二〇三－二一四頁。

（8）Blažena Przybylová, *Ostrava*, Praha, 2013, p. 504; Jaroslav Korábek, „Vývoj organizace OKR v letech 1945-1965“, *Ostrava. Sborník příspěvků k dějinám a výstavbě města*, 4, 1967, p. 215; Jan Kuklík, *Znárodněné Československo. od znárodnění k privatizaci - státní zásahy do vlastnických a dalších majetkových práv v Československu a jinde v Evropě*, Praha, 2010, pp. 148, 245, 254-255.

（9）Lubomír Bajger „K odsunu němců z Ostravska“, *Slezský sborník*, 66 (2), 1968, pp. 153-155; *Ostravsko po druhé světové válce 1945-1948*, Ostrava, 1971, pp. 64-65, 126.

（10）Zemský Archiv Opava, Číslo pomůcky:1136, Inv.č. 848.

（11）Jakub Rákosník, *Sovětizace sociálního státu. lidově demokratický režim a sociální práva občanů v Československu 1945-1960*, Praha, 2010, p. 454.

（12）Nina Pavelčíková, Petr Popelka, „Životní prostředí na Ostravsku v letech 1948-1970 a tzv. socialistická industrializace“, *Slezský sborník*, 115 (2), 2017, pp. 113-137; Doubravka Olšáková, Jiří Janáč, *Kult jednoty: stalinský plán přetvoření přírody v Československu 1948-1964*, Praha, 2018, pp. 149-150.

（13）*Ostravský Kraj* 5, 1953.2.10.

（14）*Architektura ČSR* 32 (10), 1973, pp. 483-490; Zarecor (2011), pp. 73-75; Olšáková, (2018), p. 146.

（15）近年のチェコ建築史は、戦前のバチャ住宅建築に由来する規格化・標準化を、社会主義期に大量に建設されたパネル工法の高層住宅の源流として評価している。ザレコアは、「（社会主義時代の団地を特徴づける）パネル工法団地は、アメリカ産業と結びついた資本主義企業のためにデザインされた」という興味深い指摘を行っている。Kimberly Elman Zarecor, “Socialist Neighborhoods after Socialism. The Past, Present, and Future of Postwar Housing in the Czech Republic”, *East European Politics and Societies*, 26, 2012, pp. 486-509.

（16）Archiv města Ostravy (AMO) Stavoprojekt 2 (3), 1953. 特に、オストラヴァに隣接する炭鉱地区ハヴィージョフは、戦後に新しく誕生した工業都市として、ポルバと同様の「社会主義リアリズム」建築によって都市計画が進められ、一九五五年に一万六千人、一九七〇年に八万人に急増した。Olšáková (2018), p. 156.

（17）戦前以来の機能主義建築を重視していた建築家の間からは、ソ連型建築の導入に対して、「ソレラ（ラコミーの社会主義リアリズム＝Sorela）」と軽蔑的に呼ぶ動きも現れた。Zarecor (2011), p. 11. 近年の研究はポルバ団地について、緑地のスペースも十分確保された「社会主義リアリズムの郊外の好例」として、西側都市との比較を行ってい

る。Steven Logan, *In the Suburbs of History. Modernist Visions of the Urban Periphery*, University of Toronto Press, 2021, pp. 70-74.

（18）正式には「新オストラヴァ」とされたが、本稿では「ポルバ」で統一する。

（19）同地が住宅団地の開発地として選定された理由は、風向きや周囲を緑地に囲まれた立地上の利点が指摘されている。AMO Kronika Nová Ostrava (1950-1951); Miloš Bartoň, „Socialistická výstavba a přestavba Ostravy“, *Ostrava. Sborník příspěvku k dejinám a výstavbe mesta*, 13, 1985, p. 132; Lexa (2007), pp. 124, 136-140; Zaracor (2011), pp. 150-176.

（20）*Architektura ČSR* 10, no. 1, 1951, pp. 259-265; Strakoš (2010), pp. 162, 167.

（21）一九五〇年代に実用化された住宅規格は、T一二タイプを皮切りに一九種類に及んだ。Jiří Hrůza, *Stavba měst v Československu*, Praha, 1958, p. 160.

（22）Jakub Rákosník, et al., *Sociální stát v Československu: právně-institucionální vývoj v letech 1918-1992*, Praha, 2012, p. 158; Václav Průcha, et al., *Hospodářské a sociální dějiny Československa 1918-1992*, Brno, 2009, p. 616.

（23）G四〇タイプの、一九五七年改良版として位置づけられる。

（24）Strakoš (2010), p. 181.

（25）Bartoň (1964), pp. 19-20.

（26）AMO. Čísla o Porubě

（27）Lexa (2007), p. 191, 194.

（28）Rákosník (2010), p. 296.

（29）訪問国の中には「中国」「朝鮮」の名があるが、「中華人民共和国」「朝鮮民主主義人民共和国」と考えられる。Lexa (2007), pp. 159-177.

（30）*Stručný statistický sborník 1945-1960*, p. 202.

（31）Rákosník (2010), p. 461; Rákosník, et al. (2012), pp. 296-297.

（32）国は家族住宅の建設に対しても二〇～五〇％の支援を行っていた。AMO JNV Ostrava、Průcha et al. (2009), pp. 610-611.

（33）AMO. Čísla o Porubě.

（34）AMO Kronika Nová Ostrava (1950-1951). Bartoň (1971), pp. 114-117.

（35）Bartoň (1971), pp. 121-122.

（36）Bartoň (1971), p. 118.

（37）AMO Kronika Nová Ostrava (1950-1951). 市内では、ハンガリー、ギリシャなど外国出身者は四四〇〇人、一・三％を占めていた。Jiřík, et al. (1997), p. 52.

（38）Bartoň (1971), pp. 92-94.

（39）Bartoň (1971), pp. 121-122.

（40）*Nová svoboda* 9 (221), 1953.9.13.

（41）Šmajstrlová, et al. (2019), pp. 129-131, 145-146.

（42）Šmajstrlová, et al. (2019), p. 118.

（43）Jana Jeřábková, Nina Pavelčíková, „Postřehy z každodenního života obyvatel Ostravy v letech 1945-1960“, *Sborník prací Filozofické fakulty Ostravské univerzity. Doc. PhDr. Ludmile Nesládkové, CSc. k narozeninám*, Ostravská univerzita, 14, 2007, pp. 113-116.

（44）Lexa (2007), p. 193.

（45）Nina Pavelčíková, „Romové v Ostravě během poválečného desetiletí (1945-1955)“, *Sborník prací Filozofické fakulty Ostravské univerzity. Historie* 162, no. 4, 1996, p. 95. Vladimír Vavrda, „Cikánské obyvatelstvo v Ostravě“, *Ostrava. Sborník příspěvků k dějinám a výstavbě města*, 5, 1969, pp. 238-244.

チェコにおけるロマ政策については、佐藤雪野「マイノリティとしてのチェコのロマ——非ロマとの関係をめぐって」高橋秀寿、西成彦編『東欧の二〇世紀』人文書院、二〇〇六年、一二六－一五六頁及びCelia Donert, *The rights of the Roma: the struggle for citizenship in postwar Czechoslovakia*, Cambridge University Press, 2017を参照。

(46) Vavrda (1969), pp. 238-244.

(47) Karel Sommer, „První pokusy o řešení cikánské (romské) otázky v bývalém Ostravském kraji (1950 - 1954)“, *Ostrava. Příspěvky k dějinám Ostravy a výstavbě Ostravy a Ostravska*, 18, 1997, pp. 244-255.

(48) Nina Pavelčíková, *Romské obyvatelstvo na Ostravsku (1945-1975)*, Ostrava, 1999, p. 42.

(49) Pavelčíková, (1996), pp. 103-104.

(50) Vavrda (1969), pp. 238-244.

(51) Radim Prokop, Jiří Kovář, „Slovenské obyvatelstvo v ostravské průmyslové oblasti“, *Ostrava. Příspěvky k dějinám Ostravy a výstavbě Ostravy a Ostravska*, 16, 1991, pp. 60-63, 78; Karel Jiřík, Radim, Prokop, Radim, „Zvláštnosti vývoje a skladby obyvatel Ostravy na pozadí hospodářských a sociálních proměn po roce 1945“, *Ostrava. Příspěvky k dějinám a současných ostravy a ostravska*, 18, pp. 63-64.

(52) Šmajstrlová, et al. (2019), pp. 129-131.

(53) Denisa Nečasová, *Nový socialistický člověk: Československo 1948-1956*, Brno, 2018, pp. 174-182.

(54) ポルバ出身者の中でも最も有名人と言える歌手のヤロミール・ノハヴィツァ（一九五三年生まれ）は、団地内での自らのピオニール体験をうたった曲「ポルバ」を二〇一七年に発表している。二〇一四年には、ノハヴィツァを含むポルバ出身著名人の回想が刊行されている。Radim Horák, *Adresa: Ostrava-Poruba, aneb, Patnáct portrétů porubských osobností*, Ostrava, 2014.

（もりした　よしゆき・茨城大学准教授）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇